

Title	鎗屋町講談会について：明治演説史の一断章
Sub Title	On the Yariyamachi (鎗屋町) oratorical meeting : a study of the history of speech in the Meiji (明治) Era
Author	松崎, 欣一 (Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1988
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.57, No.4 (1988. 3) ,p.37(549)- 54(566)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19880300-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鎗屋町講談会について

—明治演説史の一断章—

松 崎 欣 一

一 はじめに

明治九年九月四日付の「郵便報知新聞」⁽¹⁾に「演説・文章ヲ旺盛ニスベキ説」と題する一篇の投書が掲載されている。投書者は「三田寄留 塩川淡」という。おそらくは慶応義塾関係者の筆名であろう。投書の冒頭に、

人ノ霄壤ノ間ニアツテ禽獸ト異ナル所以ノモノハ、
口ヨク我思ヲ述ヘ手ヨク我カ思ヲ書キ、我カ心中ノ
事ヲシテ他人ニ通曉セシムルヲ得レハナリ。(中略)
今夫レ千百万人ノ中ニ坐シ一喝シテ方向ヲ定ムルモノ
ハ演説ナリ。千百万里外ノ人ヲシテ感觀興起セシ
ムルモノハ文章ナリ。

と述べる。さらに次のようにいう。演説、文章の二者は天の人にのみ賦与するところのものであって、人は奮発

勉強してこれを自らのものとしなければならぬ。しかし現実にはそれに勉める人は少く、学識、文章が未熟ではごまかしであって、その実は恥かしいとか間が悪いとか言うことで避けているにすぎない。これは大いに道理にもとるといふのである。そして、後段の一節では他人の笑いとなることを恐れて口を開いて一言も発することがなかったならば全く無学無識の人と異なることはないではないかと述べ、さらに、

此ニ一人ノ急脚アリ。手造リノ草鞋ヲ著ケ十里ノ山
険ヲ陟降シテ略疲労ヲ覚ヘス。若シ我曹ヲシテ是ノ
草鞋ヲ用シメハ足跗腫痛シテ一步モ進ム事能ハサラ
ントス。然レトモ一時ノ痛ヲ忍ヒ一步ヲ厭ハス健行
ヲ試ムルトキハ日ニ増シ月ニ進ミ遂ニ此脚夫ノ地位

ニ達スルヲ得ヘキナリ。若シ一步ヲ試ミズシテ直ニ脚夫ノ地位ニ達スルヲ得ルノ日アルヲ待ツハ猶ホ百年河清ヲ待ツカ如シ。豈ニ道理ニ悖レルノ甚シキモノニ非ヤ。

という例話を述べて終るものである。三田講演会の発会(明治七年六月)、三田演説館の開館(同八年五月)からわずかに一兩年を経たばかりである。未だなおこのような素朴な論理の展開による演説のすすめが一定の意味をもっていた頃なのである。しかしこの投書からさらに約一年を経過した明治十年十月五日付の「郵便報知新聞」の社説では演説をめぐって一変した状況が次のように述べられている。無題、無署名であるが、これも藤田茂吉あるいは小幡篤次郎など慶応義塾関係者による執筆と考えられる。

文運ノ進捗日一日ヨリ盛ンナリ。(中略)演説討論ノ我国ニ行ハル、蓋シ福沢氏ヲ以テ嚆矢トス。数年前福沢氏カ其諸友ヲ会シテ演説ノ会場ヲ開キシヤ、唯各自ノ所見ヲ討究シテ旁ラ舌鋒ヲ研磨スルニ止リシカ、爾後此会ニ與スルモノ日ニ多キヲ以テ遂ニ演説会場ヲ三田ノ高台ニ建築シ大ニ聴衆ヲ集メテ演説シタルハ明治第八年ノ五月ナリキ。当時世未タ演説

会場ナルモノアリテ聴衆ヲ招集スルモノアラス。我党始メテ此ニ従事セルノ後之ニ倣テ演説会ヲ起スモノ続々相踵キ日ニ隆盛ノ兆アリキ。然レトモ尚東京府内ニ止リシカ、昨年以來各地ノ有志集合シテ往々演説討論ノ会場ヲ開設スルモノアルヲ聞キシニ、今日ニ至テハ各府県皆此会ヲ開カサルハナク日ニ諸方ニ蔓延シテ銀行創立ト共ニ社会一般ノ流行的トナレリ。我儕カ始メテ演説会場ヲ鼓動シタルヨリ僅カニ三四ノ春秋ヲ閱スルノミ。而ルニ其各地ニ蔓延シテ今日ノ隆盛ヲ見ルハ実ニ意外ノ大慶ト云ハサルヲ得ス。蓋シ文運ノ進潮ニヨツテ人心ノ發達ヲ誘起シ學術ノ進捗ト他ノ刺衝トニ由リテ自ラ今日ノ隆盛ヲ速成シタルニ非スヤ。

演説の今日の隆盛を見るのは意外の大慶という。そしてその隆盛の原因について文運の進捗による人心の發達、學術の進歩、そして他の刺衝とよるとしているが、他の刺衝について次のように述べている。

抑モ演説会ノ斯ク速カニ隆盛ニ赴キシハ學術ノ進歩ト人心ノ開達トノ外、他ニ之ヲ刺衝セルモノアリテ然レルナリ。顧フニ一昨年来新聞條例ノ發行ヨリ、世ノ事ヲ論スルモノ自ラ其筆鋒ヲ退却セシメ政府ノ

意ニ於テ敢テ抑制スルヲ欲セサル点ニ迄逡巡シテ其
範圍内ニ縦横自在ノ論弁ヲ逞スルヲ得セサルニ至レ
リ。蓋シ又人ノ知覚ハ政府ノ意中ニ模画セル條例ノ
経界ヲ精密ニ識別スルコト能ハサルニ由レハナリ。
故ニ此点ニ於テ世論ノ鬱屈シテ伸ヒサルモノ發シテ
演説会場ニ現レ彼ノ筆ニシテ尽サ、ルモノヲ舌ニシ
テ演ルノ機会ヲ得タルナリ。即チ筆舌交代ノ場合ア
ルヲ以テ自ラ演説ノ隆盛ヲ促シ筆鋒ノ却退ト共ニ舌
鋒ノ澆進ヲ生シタルナリ。夫レ斯クノ如ク寛容ナル
政府ハ之ヲ一方ニ制シテ他方ニ制セス自由論説ヲシ
テ自由ニ發出スルノ途ヲ遮ラサルヲ以テ今日各地ニ
演説ノ隆盛ヲ誘起シタルニ非スヤ。

新聞紙條例による政府の言論統制がもたらした筆鋒の
後退が世論の鬱屈を生ぜしめ、その発散の氣運と筆を押
さえても口を押さええない政府の寛容さが舌鋒の隆盛を生
みだしたのだと皮肉をこめて主張している。さらにこの
論説は近時の演説の盛行がまま激論暴説を生じ、そのこ
とによって新らたな言論統制策がうち出されることを警
戒する論を展開している。ともあれ、明治十年前後の
「演説」をめぐる状況が興味深く伝えられた社説であ
る。

本稿はこれらの論説が発表された前後数年、すなわち
明治九年末より十三年半ばにいたる間に、江木高遠を軸
としたと推定される一群の知識人たちが断続的に組織し
た「鎗屋町講談会」「江木学校講談会」「講談会社講談
会」という三つの講談会（演説会）について、「郵便報知
新聞」の関係記事を主な拠りどころとしてその概要を紹
介し、明治演説史の一ページを構成しようとするもので
ある。但し紙幅の都合で「江木学校講談会」及び「講談
会社講談会」についての詳論は続稿に譲ることとする。

二 三講談会

前述の三つの講談会（演説会）についてはこれまであ
まり注意されることもなくいわば忘れられた存在であっ
たといつてよい。⁽²⁾しかし当時にあつてはかなり注目を集
めたものであつたようで、明治十二年五月二十八日付の
「郵便報知新聞」の社説の一節に、

演説ノ盛ンナル、東京ニ若クハナシ。各地方ニ演説
会ヲ開キ、稍ヤ盛ンナラントスルノ勢アルモ東京ニ
比スレバ微々タルノミ。今其ノ最モ著名ナルモノヲ
挙レバ江木学校講談会、嚶鳴社及三田慶応義塾社中
并ニ共存同衆ノ講談ノ如キ、毎月数次ノ会アルゴト

ニ聴衆多キハ則千人寡キモ亦三百人、其他演説講談ノ席ヲ設ケテ聴衆ヲ集ルモノ百ヲ以テ数フ可シ。東京ニ在リテハ演説ノ盛ナル斯クノ如シ。

とあって、盛んな東京の諸演説会の中でも最も著名なものの一つとして「江木学校講談会」の名をあげている。今のところ「郵便報知新聞」以外にあまり資料を求められず詳かでないところも多いが、まず三つの講談会のあらましをみれば次の通りである。鎗屋町講談会は明治九年末より結成の動きがあったが、実際には翌十年一月に始まり九月まで存続した。この間、銀座鎗屋町医学会社を会場として数回の講談会を開催している。江木学校講談会は明治十一年九月から十二年の半ばまで、井生村楼を主会場として「江木学校」と称してかなり頻繁に講談会を開催している。講談会社講談会は芝愛宕下青松寺あるいは中村楼を会場として明治十二年十月より十三年四月まで存続した。

第一表は各講談会の構成員(社員)を示している。鎗屋町講談会は人員構成としては小規模のものであった。それに対し江木学校、講談会社の社員は客員も含めれば相当数にのぼっている。またそれぞれの社員がかなり重なっていることもわかる。とくに江木高遠についてはす

べての資料に登場していることが特徴的である。福沢諭吉も三講談会に関係したとみてよい。また小幡篤次郎は明治十年後半に欧米遊学をしており江木学校にも関係すべき存在であったのではなからうか。

三講談会において取りあげられた「演題」はいわゆる政談演説に類するものも含まれるが、西欧の社会制度の紹介や自然科学系の新知識の啓蒙に関わるものが多く、最大公約数をみれば学術・文化講演会的な性格の強い演説会であったと考えられる。第二表は鎗屋町講談会において演題の判明するものをまとめたものである。

三講談会の結成経緯あるいは継承関係は必ずしも明かではないが、この点についてE・S・モース「日本その日その日」が貴重な記録を残してくれている。

江木氏その他に、日本に於ける最初の公開講演に
 関して質問したが、信頼すべき情報を得ることは困難であった。有名な福沢氏は私に^(明治四)一八七一年、数名の学者が集まり、論文や評論を読んだと話してくれた。^(明治六)この会は非公開であった。一八七三―七四年には、明六社と称する会が年長な学者達によって組織された。一般人は彼等の議論を聞くことを許された。^(明治七)一八七四―七五年に

(第2表)

鎗屋町講談会演題一覧

江木 高遠	明治10. 1. 24. 2. 14. 5. 9. 5. 23.	英米の憲法邑州治体 (前論) — 各国人民が国に尽くすの勉め各異なる大意— 英米の憲法起源の概略 偽君子の世間に必要なる論 英国の憲法議院の権限
井上 良一	明治10. 1. 24. 2. 14. 5. 9. 5. 23.	演説の効用—真理正説の勢を天下に得る—一法— 裁判証拠法 金主も傭夫の関係についての論 法律上文書の結約
矢野 文雄	明治10. 1. 24. 2. 14. 5. 9.	「恩義」の二字の解 日本県治の法 明治十年以後日本成り行きの想像
福沢 諭吉	明治10. 1. 24. 2. 14.	日本演説会の起源及びその利益 世間の害悪を除く法
小幡篤次郎	明治10. 1. 24.	「天然」の辞義

は、福地氏と沼間氏とが少数の講演をやり、僅かの入場料を取った。
(明治八)
 一八七五年の後半期、講談会という名の講演協会が創立された。福沢、小幡、井上、矢野、江木の諸氏その他の学者が、月に二回集った。講演を聞くのに、少額の入場料を取ったが、最初は入場料を取ることが、無礼であるのみならず、非常に不適當だといふので、会員のある者は大きに反対した。
(明治十一)
 一八七八年には新講談会として知られる別の会が組織され、一八七八年九月二十一日に最初の会合を開いた。江木氏は米国風に公開講演を金の支払われる職業にしようとして企てたが、入場料を取るといふので、辞職した会員が又数名あった。⁽³⁾
 明治十年七月より十二年八月まで東京大学において動物学を教授したモースは江木学校及び講談会社講談会の有力メンバーでもあり、その証言は相応の意味あるものとみてよい。
 日本における最初の公開講演 (演説) についてのモースの質問に福沢が答えた明治四年のことというのはそれに相当する事実がみあたらない。明治六年に福沢の「會議弁」の翻訳がなる気運をさしているのではないかと考

えられるが定かではない。明六社及び明六雑誌についてはこの通りであろう。福地、沼間の講演というのは嚶鳴社系の演説会開催のことと思われる。そして、「講演会」という名の講演協会 (a lecture association was established under the name of Kodankai)⁽⁴⁾ というのが「鎗屋町講演会」のことをさすと考えられる。但し一八七五年というのは一八七六年の誤りとみなければならぬ。さらに「新講演会」として知られる別の会 (another organization was effected in 1878, known as the New Kodankai)⁽⁴⁾ というのが「江木学校講演会」に相当する。またこれらの記述から、当時、江木高遠らを中心に米国風の新しい公開講演会のシステムを創設しようという気運があり、その中に相次いで講演会が設立されたらしいことが窺える。この点についてはモースはさらに自らが江木学校で講演したことにふれる前段で次のようにも述べている。

私は日本で初めて、日本人だけを聴衆にして行った、公開講義のことを書かねばならぬ。米国から帰った若い日本人教授達が、公共教育の一手段としての、我国の講演制度に大きに感心し、東京でこのよ
うな施設を設立しようと努力した。これは非常に新

鎗屋町講演会について

しい考なので彼等は一般民衆の興味をおおるのに大きな困難を感じた。然しながら彼等は勇往邁進、ある茶店(5)の大きな部屋を一つ借り受けた。一般民衆は貧乏なので、入場料も非常に安くなくてはならぬ。⁽⁶⁾

米国から帰った若い日本人教授連とは江木高遠や井上良一のことであろう。彼等の努力がさまざまな困難を克服して公開講演会という新しい仕組みを生み出したとしている。⁽⁷⁾ その困難の一つが入場料制度であったというが、このことについては大槻如電「洋学史年表」の明治九年の項に次のような記事がある、

公開演説嚶鳴社起る。福地源一、沼間守一等所唱出。明年又福沢諭吉も講演会を設く。共に席料を収む。憶回せばおのれ爾時入社を勧められしが、木戸錢取るは寄世芸人(7A)じみて面白からずと拒絶して長広舌は竟に振はざりき。

学者・知識人が入場料を徴収して講演をするなど論外だというわけである。またモースもいうように、明六社や沼間等の演説会に続いて開かれるようになった講演会が創設期の公開演説会の一つとして位置づけられ、それに大槻如電も参加を求められていたらしいことを伝えている。これが鎗屋町講演会のことであると思われるが、さ

らにこの講談会を福沢の設立だとしていることも注目される。この点については石井研堂「明治事物起源」においても「同十年の夏頃、福沢氏、京橋鎗屋町に講談会という席を設けたるは全くの寄席に同じく、木戸を置いて聴客より席費を収めたり。是より今の演説会の体裁とはなれるなり」と記されている。モースも公開演説会といふものの創設について江木・井上等の動きを伝える一方で、この講演会関係者の連名の筆頭に福沢の名をあげている。しかし、福沢全集などをみても鎗屋町講談会と福沢の関わりを伝える資料は今のところみあたらない。いわゆる「演説」の開拓者ともいふべき位置にある福沢にとって、鎗屋町講談会の創設は慶応義塾外での初めての本格的な公開演説会の試みといつてよいものであり、福沢自身による何等かの資料が残されてしかるべきと思われるがこの点についてはなお後考をまたねばならないであろう。

三 鎗屋町講談会

(1) 社員

鎗屋町講談会の社員(構成員)五名は二つのグループに分けられる。一つは福沢及びその門下の小幡、矢野であ

り、他は江木及び井上である。しかし、江木、井上も慶応義塾外にあったがともにアメリカ留学を体験したことをはじめとして相似た経歴をもちその中において早くから福沢及びその周辺との接触があった。結局、鎗屋町講談会の構成は福沢及び慶応義塾を核とした結びつきといふことができよう。そしておそらくは江木、井上の側からの働きかけがあり福沢がそれを受けて小幡、矢野を加え、さらに次節にみるように医学社会を会場とするなどの準備を整えて発会にこぎつけたのではないかと考えられる。

ここで福沢についてはしばらくおいて、他の四人について略述しておきたい。

(小幡篤次郎)

小幡篤次郎は天保十三年、中津藩士篤蔵の長子として生まれた。幼少より藩儒野本白巖について漢学を修め、十七歳にして藩費進修館塾長となった。元治元年福沢に伴われて上京してその塾に学び慶応二年には塾頭となった。兼ねて幕府開成所助教ともなった。明治十年五月欧米に遊学し年末に帰朝、二十三年には慶応義塾塾長となりまた貴族院議員に勅選された。この間、東京学士会院会員に選ばれ、また交詢社の設立、時事新報の創刊に尽

力するなど福沢諭吉の片腕として慶応義塾の内外に重きをなした。明治三十八年、六十八歳で歿している。著訳書には弟甚三郎との共著「英文熟語集」、明治初年の初等教育の教科書として盛んに使用された雷、地震、流星、虹などの自然現象を平易に説明した「天変地異」、初等教育の教科書として盛んに用いられたチェンバースの翻訳「博物新編補遺」、経済学入門書「生産道案内」、ウェーランド経済書の翻訳「英氏経済論」、トクヴィルの「デモクラシー・イン・アメリカ」の抄訳「上木自由之論」、J・S・ミルの宗教論を翻訳した「弥児氏宗教三論」などがある。また英国下院の小書記官レジナルト・バルグレーヴが会議運営の方法を説明した著書を翻訳した「議事必携」があり、また英版原書の小冊子を翻訳していわゆる演説スピーチのあらましを紹介した「会議弁」の合訳者として福沢諭吉、小泉信吉とともに名を連ねている。三宅雪嶺は小幡について「読書に於て福沢に優ると称せられたるも、性温情、人と争はず特性を發揮するに至らず」と述べている。たしかにその一面を捉えた評言であるが、特性を發揮しなかったというよりはむしろその学識と性情が初期の慶応義塾の基盤を確立するに与つて大いに力があつたといふべきであらう。

(矢野文雄)

矢野文雄(1850)は豊後佐伯藩士光儀の長子として嘉永三年に生まれた。藩費四教堂に学び広瀬淡窓の高弟秋月橋門及び帆足万里晩年の門弟楠文蔚に指導を受けた。明治三年葛飾県知事となった父光儀に従つて上京し田口江村の門に入った。翌明治四年慶応義塾に入り、七年には大阪慶応義塾続いて八年には徳島慶応義塾の責任者となった。九年には東京に帰り「郵便報知新聞」に副主筆として入った。十一年に官界に転じ大隈重信の信任を得て大蔵省書記官から太政官大書記官、統計院幹事となった。十四年の政変に際し大隈に従つて下野、再び「郵便報知新聞」に戻った。立憲改進黨の結成に参画、「郵便報知新聞」を同党機関紙として健筆をふるつた。「経国美談」などの政治小説を連載し文学による民権思想の民衆への浸透を図つた。十八年より翌年にかけて渡欧、二十三年に宮内省式部官、三十年には駐清公使となった。三十五年には日本における社会主義文献の鼻祖ともいふべき「新社会」を上梓した。三十九年大阪毎日新聞社に入り、大正十三年には同副社長となり昭和二年には相談役となつている。昭和五年、八十歳の生涯を閉じた。三宅雪嶺は「風采が長老らしく、夙に同志間に重きを成す。新聞

社に在りて犬養の上に藤田あり、其の上に矢野あり、必ず世に重きを成すべしと期待されたるに、相当の位置を占めつゝ期待の如くならずして終る。」と評している。⁽¹²⁾

(江木高遠)

江木高遠⁽¹³⁾は備後福山藩儒鰐水四男として嘉永二年に生まれた。明治元年長崎に出てフルベツキにつき洋書を学び、二年上京して開成学校に入り、三年七月皇族の海外留学第一号である華頂宮博経親王に随従してアメリカに渡り、六年八月帰国している。この間、旧中津藩主奥平昌邁に従って同じくアメリカに学んでいた小幡甚三郎が、六年一月に発病するに及んでその死にいたるまで世話をした。このことのため、同年四月には甚三郎の兄篤次郎及び福沢諭吉を訪ね、また五月には鰐水が三田に篤次郎及び福沢諭吉書翰には、「福山藩の江木高遠と申人、兼て懇意、此度の一條に付ても非常の心配致し呉候趣は同人よりの来状を以て知るべし」⁽¹⁴⁾とあって、甚三郎病死のことが高遠より福沢にも報告されており、福沢及び小幡と江木がこの時点で互いによく知る間柄であったことがわかる。

江木は明治七年六月に再度アメリカに渡り、ニューヨーク

ークのコロンビア法律学校に学び、九年、次席の成績で卒業し帰国した。この留学のために高遠は華頂宮、奥平昌邁、福沢諭吉から資金を借用した。「一金貳百円也。右拙者米利堅遊学致候ニ付借用致候處実正御座候。然ル上ハ今より十年を出ずして屹度返上可仕候。」という明治七年六月五日付の江木高遠から福沢諭吉宛てた「金子借用之証」⁽¹⁵⁾が残されている。借用証ではあるけれども

「今より十年を出ずして」という文言の中には、両者の心の交流を読みとることが出来るように思われる。「兼て御話しいたし置候洋服の注文、可然御引請可被下候」⁽¹⁶⁾という同月十六日付で福沢から丸善仕立局高橋岩路宛て江木を引合わせている書翰がある。おそらくは江木の渡米に際しての福沢の心遣いである。

福沢は令息一太郎、捨次郎の教育を江木及び井上良一に託すべく江木の住宅近く(京橋区山城町)に一軒の家を構える計画をもっていた。⁽¹⁷⁾井上の発病によって取りやめになったが福沢の江木及び井上に対する期待の大きかったことを示している。

江木は明治十年には東京英語学校、そしてその後身である東京大学予備門に経済学及び英語の教鞭をとるようになって⁽¹⁸⁾いる。さらに十二年には官界に転じ元老院権大

書記官、次いで外務一等書記官となった。この間、交詢社の設立に参画しまた講談会に活躍することとなるが、十三年三月ワシントンの日本公使館に赴任し、六月には自ら命を絶つ。三十二歳であった。三宅雪嶺は江木鰐水の歿伝の中で高遠について次のように論評している。

四男高遠最も頭はれ、雄弁を以て鳴る。(風采頗る揚がり、且つ自ら深く意を用ゆ。演説は波瀾に乏しきも、当時第一の雄弁家と称せらる。松林伯円は高座に上りて云ふ、「当今演説にては江木先生、講談にては斯く申す松林伯円」と。)予備門教諭より一躍元老院権大書記官となり、外務省一等書記官となり、米國に赴任し、間もなく自殺す。(一時雄弁にて満都の人気の湧きたれど、間もなく冷却し、米國に赴任する頃、殆ど全く忘れらる。遺書に西南の乱に關係せし旨を記せる由なるが、官職を利用し、多くの美術品を無賃にて携待し、税官吏の指摘する所となり、公使吉田に追究され、遂に短銃にて自殺す。)鰐水は老後精神朦朧、人が高遠の死を知らさず、鰐水は屢々大声にて高遠を呼びたり。(墓碣銘に「不知者以為狂」とあるは、形容を婉曲にせるなり。)

なお、自殺の原因となった美術品の携待云々は江木が外交官特権を利用してアメリカの友人のために陶磁器その他の工芸品を無関税で持込んだということであった。おそらくは親しい友人のための個人的な美術品の持込みというほどのことであつたのだが、それが当時アメリカにひしめいていた日本人の輸出業者達に糾弾され大ごとになつてしまつたということのようである。

(井上良一)

井上良一は筑前福岡藩の人である。嘉永五年六月に生まれた。早くより才覚を表わし藩命により長崎に学び、慶応三年には米國留学を命ぜられた。明治元年より在米、兵学、法律、心理学などを学び七年六月にはハーバード大学より法律学士の稱を得て帰国した。直ちに海軍省に出仕したが、八年には辭職して東京英語学校教諭兼開成学校教授となり、十年には東京大学法学部の日本人として最初にして唯一人の教授に任じた。しかし間もなく発病し明治十二年一月に自ら命を絶つた。二十七歳であつた。手塚豊氏⁽²²⁾によれば彼の業績として在米中の論考四編が残されておりそれから考えると、彼にして健康に恵まれたならば明治初年の法学界に輝く足跡を残したであらうという。この間、福沢あるいは慶応義塾との関わ

りも深く、明治九年十一月に三田演説館に隣接して建設された集会所「万来舎」の命名は井上の提案によるものであった。また先きにも述べたように江木高遠とともに福沢諭吉の子息の教育にあたることを望まれていたわけであるが、井上が神経衰弱に陥ったために中止された。

福沢は広尾の別邸内の一室に井上を引取り療養させている。ほどなく快方に向い大学にも出講していたが麴町番町の判事平賀義質をたずねた折に邸内の古井戸に発作的に身を投じたのである。三宅雪嶺によれば、その前々日に司法省より大学に出講していた同省大書記官鶴田皓の教場において叱責を受けたこと、英人教授グリスビーに「井上は米国の良き学生なりき」と冷笑されたことなど大学内における地位の不安定さが自殺の引き金になったように説明されている。⁽²³⁾ 福沢諭吉は同年二月四日付藤野善藏宛書翰の中で「何とも申様も無之、残念至極の事に⁽²⁴⁾候」と井上の死を悼んでおりその期待の大きかったことが窺われる。

ところで井上良一及び江木高遠と福沢諭吉とを結びつけるものとしてなお「人力社」⁽²⁵⁾についてふれておかねばならない。人力社とは明治六年にアメリカ留学中の目賀田種太郎が富田鉄之助、松本荘一とともに日本及び世界

の大勢を論議し、各自の修めた専門的知識を傾けて社会の改良と国益の増進を計ることを目的として組織した団体である。人力社とはその趣旨広大なるも人力の及ぶところ不可能なことはないとの当時の海外留学青年たちの旺盛な意気を反映した命名であった。会員は米国留学な⁽²⁶⁾いしは遊学の経験者を中心とした新時代の知識人たちであって、ここに福沢、江木、井上も加っていたのである。とくに井上と福沢の接触はこの会に始まると推定してよいであろう。彼等は日本及びアメリカいずれの場所にあっても時々集会をもち会毎に同社の目的達成に向って談論し二名ずつ演説するを例とした。会員としては前記発起人三名と福沢、江木、井上のほか加藤弘之、浜尾新、森有礼、外山正一、神鞭知常、寺崎遜、大類久徴、塩谷時敏、島田三郎、三田倍、戸田氏共、畠山義成、平山成信、高木三郎、長田銈太郎、正木退蔵、相馬永胤、津田純一、原口要、鳩山和夫、原六郎、原保太郎、村田一郎、篠崎桂之助、手島精一、香月桂五郎、鈴木重邦、朝比奈一、太田昇平等であった。なお目賀田、江木、井上等は人力社の他にも不二社、法律会社といった団体を組織していた。⁽²⁶⁾ 前者は日米両国の物産を相互に輸出しその利益を得て社員各自の学資を補足し、かつ家産を起し

て活動の余裕あらしめようとするもの、後者は法律問題を論議討究し、欧米法律書の翻訳や日本の法律改正また日本における法律学校の設立を計画し、さらにそれぞれ自主独立の代言人たらんと目的に向って組織されたものである。当時、気鋭の新知識人たちの意気込みが窺えよう。

(2) 講談会の経過

鎗屋町講談会についての「郵便報知新聞」の初出記事は明治九年十月十八日のものである。

来月一日より福沢、小幡の両先生及び近日米國より歸へりし江木高遠君、井上良一君、敝社の矢野文雄、銀座鎗屋町に於て演説講義を始め誰にしても聴講を勝手に致させます。精しき事は告知を御覧なさい。

同日の告知欄とは次の通りであり、同文の告知記事が以後数日間連続して掲載されている。

毎週水曜日午後七時より銀座鎗屋町七番地に於て、
福沢諭吉・小幡篤次郎・江木高遠・井上良一・矢野文雄出席致し演説講義相始め候間、此段告知致候。
但十一月一日初会を開く。聴講切手ハ左の場所にて
売渡申候。

鎗屋町講談会について

日本橋通り二丁目 丸屋善八。

両国薬研堀 報知社。

銀座鎗屋町七番地 医学会社。

十月 講談会執事。

さらに十月二十七日には「福沢諭吉先生方が演説講義の稿本ハ敝社へ廻されますから論説と標記して其度々掲載致し、又稿本の無きハ筆記して出します故此に五披露申ます。」という記事がある。当時藤田茂吉を主筆として慶応関係者の多い郵便報知の記事であるということもあろうが、ここでは福沢を軸として講談会発足のことが進展しているように見える。ところがここまで報道されながら、月末三十一日には「都合有之日延致し候」という告知欄の通知記事があり、また十一月一日には本文記事として、「銀座鎗屋町の演説ハ今夜より発会の処社中の都合に因り日延になりたり。猶発会の期日ハ追てお知らせ申し升す。」と伝えられる。準備不足であったのか、事情はよくわからない。そして翌年一月二十二日再び告知欄に、「昨年中度々報告せし銀座鎗屋町七番地に於て演説の儀、是迄の毎週水曜日を改めて一月二次と為し毎月第二第四の水曜日を以て毎会午後七時より開会。即ち本月廿四日より発会致候間此段報告す。」という通告が

掲載される。前年の予告記事との比較にみる限り変化しているのは講談会開催日が毎週水曜から、毎月第二・第三水曜と削減されていることのみであつてこの点についての調整が発会を遅延させたのであろうか。ともあれ、明治十年一月二十四日第一回の講談会が開催された。同月二十六日の報告記事をやや長文であるがそのままに引用したい。

一昨夜銀座鎗屋町の演説会にハ福沢、小幡両先生を始め江木高遠先生、井上良一先生、敝社の矢野文雄等の会員残らず出席し開会ありたり。福沢先生ハ日本演説会の起源及其利益を述べられ、小幡先生は天然と云へる辞に第一義と二義ある趣意を説かれました。又江木高遠先生ハ英米の憲法邑州治体の前論として各国人民か国に尽すの勉め各異なる大意を論じ、井上良一先生ハ真理正説の勢を天下に得るハ必らず之を助る者なかるへからず演説ハ則ち其一法なるの主旨を演説されました。敝社の矢野文雄ハ道德上恩義の二字を解剖し東洋の道德世界ハ恩の一字に圧せられて人民か義を知らざるの病因を論じました。全体此度の演説所医学会社ハ僅に二百人計を容るゝ位の処ゆえ場所狭にて、定刻七時前には既に聴

聞人ハ二階に満ち梯子段までつまりました。夫れ故七時後に参られた人は残らず断りし由。後会も必ず盛な事ならん。

福沢と井上が演説の功用と意義を説いている。小幡の論は東洋的自然観と西歐的自然観の相違をのべるものである。江木は英米の憲法や政体についてのべる序論として、各国人民が国に尽す勉めはそれぞれ異なることを説いたという。日本人民の役割についてはどのように論じたのであろうか、いずれも演題のみで詳しい内容を知らることができないが、新しい試みの出発にふさわしい内容になつていたと思われる。

こうして一月二十四日の第一回に続いて、二月十四日、三月十四日、三月二十八日、五月九日、五月二十三日の都合六回に及ぶ講談会開催についての記事を郵便報知新聞の本文ないし告知欄に確認することができる。またこの内の三月の二回分を除いた各回の演題についても知ることが出来る。第二表はそれらをまとめたものである。維新の日本の現状をふまえながら、西歐社会の原理や制度についての啓蒙を図ろうという演説、講義が用意されていたことが読みとれよう。但し、当時の新聞報道の通例でこうした会合についての情報は予告記事が掲載

されるだけであることが多く、鎗屋町講談会の場合も一、二月両度を除いていずれも予告記事のみであることに注意しなければならない。

なお「医学会社」とは明治八年四月に「専ら医風ヲ改良シテ學術ヲ講究スル」ことを目的として設立された我國初の医学会ともいふべき「東京医学会社」のことである。⁽²⁷⁾ 在官の医師として松本順、林研海、戸塚文海、緒方惟準、石黒忠憲、桑田衡平、橋本綱常、名倉知文、土岐頼徳、田代基徳、小山内健、八杉利雄、また在野の医師として佐藤尚中、島村鼎甫、石井謙堂、足立寛、桐原玄海、杉田玄端、松山棟庵、早矢仕有的、隈川宗悦、長谷川泰等の当時一流の医家達が結成したものである。はじめ、松山棟庵の慶応義塾在塾時代以来の友人早矢仕有的が桧物町（現、中央区八重洲二―三丁目内）に開設していた交銀支局の一室を事務所としたが、明治九年になつて鎗屋町（現、中央区銀座四丁目四―一）に移転したものである。鎗屋町講談会は東京医学会社の社屋を借用したわけであろう。白漆喰で塗り潰した煉瓦作りの総二階建てであり、建坪約四十坪、二階はベランダ付の大広間に作られ、階下は二室と三坪余の土間からなる外観が洋風の日本家屋であつたという。医学会社を会場とし、あわ

せて早矢仕有的の丸屋商社そして郵便報知新聞社が講談会の聴講切手の販売を請負っているわけで、このことは鎗屋町講談会の出発にあたって福沢諭吉の存在が大きかつたことを示すものであろう。

ところで、二月十六日付の講談会報告記事は次の通りである。

一昨夜、銀座の鎗屋町の演説会は相替らず盛にて、七時前にハと衆堂に満ち後れて来りし人々ハ皆断られて帰りし者も沢山なり、出席せし先生ハ福沢、江木、井上及び敝社の矢野にて、外に客員聴して外山先生も演説せられたり。福沢先生ハ世間の害悪を除くの手続を論せられ、江木先生ハ英米の憲法起源の概論、井上先生は裁判証拠法を論せられ、矢野文雄ハ日本皇治の法を述へ天下の治安ハ実力相抗するに在る旨を演説いたせし由。

満員の聴衆を集め入場出来なかつた者も出たという。福沢、江木、井上、矢野の他に客員弁士の演説も行われた。外山先生とは外山正一のことであると思われる。

四月の例会は実施されなかつたらしいが、四月十一日の講談会延期のことが同日の告知欄において「銀座弓町二十九番地 江木高遠」の名によって通知されているこ

とに注目したい。先きに引用した講談会発会の告知が「講談会執事」の名目によって出されていることに相当するもので、江木が鎗屋町講談会を取り仕切っていたことを示すものであろう。

四月休会のあと五月九日の記事として講談会再開の通知が次のようになされている。

銀座鎗屋町の講談会ハ社中の都合により是迄二三度休会せしが、此度社員協議し此会を益々後來盛大になすべき見込みにて今夜より又々開会に相成るよし。矢野文雄の論題ハ明治十年以後日本成り行きノ想像、江木先生ハ偽君子の世間に要なる論、井上先生ハ金主も傭夫の關係に就ての論と申す事、此外にも客員として臨時出席の諸先生あるへし。定めて盛んな事と存します。

記事中に「是迄二三度休会せしが、此度社員協議し此会を益々後來盛大になすべき見込みにて」とあり、新しい試みを定着させるべくさまざまな討議が重ねられていることが窺えよう。五月二十三日には次のような記事がある。

今晚ハ例の通銀座鎗屋町の演説会にて江木、井上等の諸先生及び矢野文雄も出席致し、自余客員とし

て出席の諸先生も多しと。此の会ハ是迄午後七時より始まりしところ、今夜からハ午後八時の開会になりました。江木先生の論題ハ英國の憲法議院の権限にて、井上先生ハ法律上文書の結約を論せらるゝ由、余ハ略す。

当時の生活習慣として午後八時というのはかなり遅いのではないかと思われるが、開会時刻を改めての会合であった。客員弁士（講師）の参加もかなり見込まれるようになって来たらしい。しかし翌日の十三日の告知欄には次のような通知が掲載される。

本日の夜ハ例の通開会致可き筈なれども、社員中に不快之者有之人少に付休会致候。且つ梅雨中引続き暑に向ひ候得ハ、暫時休会致し九月より開会致候に付此段公告致候。

六月十三日 鎗屋町 講談会執事。

そして、九月二十四日になると同じく告知欄に鎗屋町講談会。

本月より開会可致之処、社員中不快之者等も有之、都合に因て延会致し候。猶開会之期日ハ追て公告可致候。以上。

九月

講談会執事

という延会通知が掲載され、これより後、講談会開催の通知は途絶える。「社員中不快之者有之」というのが文字通りのことだったのか、あるいは他に理由があったのかは今のところ詳ではない。鎗屋町講談会はこうしてわずか十か月ほどでその短い歴史を終えることになるのである。

註

(1) 大洋写真工芸社版マイクロフィルム(慶応義塾図書館蔵)による。「郵便報知新聞」よりの引用について、漢字及び仮名の字体は現行常用のものとし、振り仮名はこれを省いた。句読点を適宜施した。

(2) フェノロサやモースについての次のような論稿の中で触れられているのがわずかな紹介例である。磯野直秀「エドワード・シルヴェスター・モース——その在日中の足跡をたどる——」(『慶応義塾大学日吉論文集 自然科学編18』所収。一九八四年三月刊)。同「進化論の日本への導入とモース」(『日経サイエンス』一九八五年四月号所収)。同「日本動物学史覚え書その二」栗原信一「フェノロサと明治文化」山口静一「フェノロサ(上・下)」また中島久人「都市民権運動の成立——東京における都市知識人結社の動向——」(『歴史評論』405号所収)においても簡単に紹介されている。

鎗屋町講談会について

(3) 「日本——その日その日」(石川欣一訳。東洋文庫本第三卷二七〇八ページ)

(4) F. S. Morse, *Japan day by day*, vol. II pp. 426-428.

(5) 「井生村楼」をさす。

(6) 「日本——その日その日」(石川欣一訳。東洋文庫本第二卷一二四ページ)

(7) この頃、江木学校などのほか東京大学の構内においてもモース、フェノロサ等を講師とした公開講演が盛んに行われている。

(8) 石井研堂「明治事物起源」第一編人事部三ページ。

(9) 小幡については主として富田正文「慶応義塾出身人物伝——その四——小幡篤次郎」(『三田評論』621号所収)による。

(10) 三宅「同時代史」第三卷四五八ページ。

(11) 矢野については主として「龍溪矢野文雄君伝」による。

(12) 三宅「同時代」第六卷二四八〇九ページ。

(13) 江木については主として「江木鰐水日記」(『大日本古記録』)の關係記事及び同書下巻所載の鰐水年譜、また矢野文雄撰文墓碑(磯野直秀「日本動物学史覚え書その二」所収)による。

(14) 「福沢諭吉全集」第十七卷一四六ページ。

(15) 慶応義塾福沢研究センター所蔵福沢宗家寄託史料の

内。このことについて同センター嘱託西沢直子氏より教示を得た。福沢諭吉全集第二十一巻十七ページ所収の「総勘定」(福沢の金銭出納帳)によれば、明治十一年中の入金として「百円 江木高遠え半貸の分」とある。

付記

松崎「『郵便報知新聞』にみる江木学校講談会等関係記事——明治演説資料——」(『慶応義塾志木高等学校研究紀要』第17輯所収)を参照願えれば幸いである。

- (16) 「福沢諭吉全集」第十七巻一七二ページ。
- (17) 石河幹明「福沢諭吉伝」第二巻二五九ページ。
- (18) 山口静一「フェノロサ」上巻五二ページ。
- (19) 三宅「同時代史」第二巻一五五～一五六ページ。
- (20) 山口「フェノロサ」一三～一四ページ。
- (21) 井上については主として「慶応義塾百年史」(別巻大野学編二一～二二ページ)及び矢野文雄撰文墓碑(『朝野新聞』明治十三年二月十日付記事)による。
- (22) 「慶応義塾百年史」別巻大学編二二二ページ。
- (23) 三宅「同時代史」第四巻二二二二ページ。
- (24) 「福沢諭吉全集」第十七巻二八二二ページ。
- (25) 「男爵目賀田種太郎」八〇～八三ページ。
- (26) 「男爵目賀田種太郎」八三～九〇ページ。
- (27) 「東京慈恵会医科大学八十五年史」二〇～二三ページ、
「東京慈恵会医科大学百年史」一二九～一三四ページ、
一五九～一六〇ページ。このことについて長尾政憲氏より教示を得た。なお明治十四年五月にこの医学会社の中にのちの「東京慈恵会医科大学」の前身となる「成医学会講習所」が発足している。